

INTERVIEW

野口英世記念・米国財団法人野口医学研究所 理事長
ハワイ大学医学部外科 教授
町 淳二先生



【プロフィール】 町 淳二先生 1977年順天堂大学医学部卒業。沖縄県立中部病院にて卒業研修、1981年にイリノイ大学病理・外科リサーチフェロー、同大学にて1982年外科修士、1984年病理博士。一時帰国後、1987年ペンシルベニア医科大学外科研究講師・外科レジデント、1993年ピッツバーグマーシー病院外科レジデントを経て、1995年ハワイ大学医学部外科准教授、1998年に米国外科専門認定医。2001年よりハワイ大学医学部外科教授。専門領域は一般外科、消化器外科、外科領域での超音波。アメリカ外科学会で腹部超音波の指導、コースチェアマン。最近は特に日米の医学教育、臨床研修関連の仕事に従事。2008年より米国財団法人野口医学研究所理事長を務める。JADECOCの東京ベイ・浦安市川医療センターでは、NKP研修委員長の予定。

グローバルな地域医療への 診療・教育大改革を求めて

聞き手：山田隆司 公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

野口医学研究所の活動

山田隆司(聞き手) 今日は町淳二先生のお話を伺います。町先生は地域医療振興協会がJADECOC-NKP(NKP: Noguchi Kenshu Program)として協同で研修に取り組んでいる野口医学研究所の理事長を務めていらっしゃいます。まずは、先生の経歴を簡単に紹介していただけますか？

町 淳二 私は1977年に順天堂大学医学部を卒業し、その後沖縄県立中部病院でインターン、外科レジデントを修了しました。なぜ中部病院の外科を選んだかという、そこに当時「ハワイ大学臨床研修プログラム」というのがあることを知り、私は子どものころに青年医師ベン・ケーシーを

主人公とした米国のテレビドラマを見て、あんな医者になりたいと憧れたのですね(笑)。ですから医学部を卒業してからずっと海外で医師となることを目指していました。それからイリノイ大学の外科・病理でリサーチフェローとなり、その後外科で修士、病理で博士号を取得しました。

山田 そのころから野口医学研究所とのかかわりがあったのですか？

町 私がフィラデルフィアのペンシルベニア医科大学にいたころに、「野口英世」を記念しフィラデルフィアに、野口医学研究所本部を浅野嘉久先生やゴネラ先生らが設立し、日米医学交流活動を始めたのです。そこで育った日本人医師による「野口ALUMNI」が、ちょうどフィラデルフィアで外科の研修をしていた私をどこかで知ったのですね。それで声がかかったのです。

野口医学研究所はフィラデルフィアで米国初の人間ドッククリニックを開設したり、トーマス・ジェファーソン大学を中心とした「野口医学交流プログラム」を開始しました。私が1995年にハワイ大学に赴任してからは、ハワイ大学との交流プログラムもかなり進展しました。そういった形で、現在も短期臨床研修のために、学生と研修医をアメリカに送っています。大体毎年20～30人に上りますね。

山田 地域医療振興協会とお付き合いが始まったころの経緯をお話いただけますか。

町 2008年12月に私が野口医学研究所の理事長に就任したのですが、その時に、何か新しいことをしたいと考えたのです。自治医大出身でハワイ大で研修もした藤谷茂樹先生がちょうど学会でハワイに来たので「一緒に何か新しいことをやろう」という話をして、小さい目標では面白くないから、「日本でメディカルスクールを作ろう」と言ったのです。そうしたら彼は「この人、何を言っているの？」というような顔をしましたが(笑)。

日本は高校を卒業してから6年間の医学部に

入学しますが、米国は大学を卒業してから4年間のメディカルスクールに入ります。それが米国と日本の医学教育の大きな違いだと思いますが、医師としてのサイエンス面とともにアート面の教育にはメディカルスクールは優位性があり、そのシステムをいつか日本に導入したいと考えていたのです。夢みtainな話だけど、まずは人が揃わないと何もできないからと、これまで野口の支援を受けて留学したアラムナイのリストを作って、メーリングリストでやりとりしましょうと、藤谷先生が提案し、それで彼がかなり動いてくれた結果、200人ぐらいと連絡が取れたのですね。

そのリストを見たら、アメリカの専門医の資格を取得している人が80人近くいたのです。これはすごいなと思い、みんなと連絡を取り合って2009年7月にアラムナイ総会を開きました。その場でメディカルスクールを作りたいという話をしたところ、みんなが賛成してくれて「研修病院と研修プログラムが必要だからどこか探そう」ということになり、探している時に、地域医療振興協会(JADECOCOM)という面白い組織があることを知りました。JADECOCOMに注目したのは、藤谷先生や現在野口の評議員会会長に就任している佐藤隆美先生が、自治医大の出身で先生方とつながりがあるということもありましたが、JADECOCOMが浦安に新しい病院を作る予定であることに目を付けたのです。というのは、いくつか他にも研修病院候補があがったのですが、すでに既存の医師がいるところに、野口のメンバーが大勢行って何かをやろうとしてもうまくいかないで、なんとか新しくオープンするところがないかと探っていたのですね。そこで、東京ベイ・浦安市川医療センターでやりたいと考え、吉新理事長にコンタクトをとりました。最初は夢みtainな話を語って、どこのエイリアンが来たかと思われたようですが(笑)、1年ぐらいかけて、お互いに理解し合えたと思います。

JADECOM-NKP

町 われわれとJADECOMとの協力がうまく進んだ主な理由は、野口は人材があるけれど経済的な基盤も場所もない。けれどJADECOMは関連病院がたくさんあって、財政的にも安定しています。JADECOMの目的は地域の医療に貢献するというです。われわれの最終的なゴールの一つもジェネラリスト育成ということで同じです。われわれはよい教育を通して24時間救急・ジェネラリスト育成・国際病院などの最終ゴールを目指そうと考えています。米国へ留学した医師は米国の教育を知り、臨床教育に興味を持って帰ってくる人がかなり多くいます。ところがそういう人たちが日本に帰ってくると、向こうで学んできた臨床や教育の能力を発揮することが難しいという状況が日本にあります。ですからそういう人たちの能力を発揮できるようにしたいと考えたのです。

スーパースペシャリストは大学に任せておけばよい。日本に最も欠けているのはプライマリ・ケアができて、救急もできて、日本のどこへ行ってもジェネラリストとして通用する人で、そういう人材を育てたいというのがわれわれの目的であり、そこがJADECOMと目的が一致した点だと思います。

山田 ありがたいお話です。

自治医大の卒業生が中心になって組織したのが地域医療振興協会、JADECOMです。われわれは医療に困っている地域、医師確保に困っている病院、そういったところを助けながら、基本的には、さらに困っているところを支援していこうと考えています。先生がおっしゃったように、大学ではスーパースペシャリストをたくさん育てるのですが、スーパースペシャリストを育てるばかりに、医学部卒業生の多くが地域の中小病院を敬遠して、都市部の大病院に集まってしまう。地域医療に従事することは専門医療から

すると、質が低いと受け取られがちなのです。

町 それは本当によくはないですね。私は日本の医師の認識だけでなく、一般国民の認識も悪いと思うのです。米国ではジェネラリストとスペシャリストというのはレベルとしては対等で、ジェネラリストは広い分野をプライマリ・ケアとして診るし、スペシャリストは専門性の分野を診る。プライマリーからスペシャリストへ紹介するというシステムにはなっていますが、レベルは同等です。私はファミリーメディスン、家庭医療に従事している先生が、広い範囲の知識を持って診療されるというのは、スーパーマンではないかと思うぐらい尊敬しています。

山田 自治医大の卒業生の多くは卒後研修を経て山間へき地や離島へ、一人で赴任するわけです。そのニーズに合わせようとする、一つの専門性を持っていてもあまり役に立たない。自分では自信があったつもりでも、自分の知らない分野、例えば妊婦さんの熱発や耳の中に虫が入ったなどといったそれまであまり経験していなかったことに遭遇して自信を失ってしまう。ところが地域のニーズは、実はそういった広範なものなんです。

そこでこれまで私たちは山間へき地や離島などの地域医療に焦点を当てて、診療所ベースの研修についてはそれなりに力を入れて取り組み、ある程度の道ができてきたようにも感じます。しかし今、医療崩壊、医師不足と言われてるのは、そういった診療所よりもむしろ100床、200床の地域の中小病院なのですね。ところがそういった病院の医師を育てるということになるとわれわれには十分なノウハウがない。地域の中小病院の医師確保や、あるいは総合医の研修と結びついたキャリアパスをどう設計していくのが、今のわれわれにとっては大きなテーマの一つになっています。私自身はファミリーメ

ディシンの興味があって、自分自身のバックグラウンドもそちらにシフトしているのですが、今の日本全体の医療ニーズを考えると地域の病院の問題は無視できないという中心的課題になっているのです。そのような状況だったのですが、当初先生方のお話を聞いた時はわれわれ「へき地医療のための団体」と、海外を指向して海外の研

修を取り入れていこうという先生方と一体どこで折り合うのだろうかかと少々疑問でした。

町 最初はわれわれもそうでしたし、お互いに探り合いというところだったのですよね(笑)。しかし最終的には、救急も含めたジェネラリストの育成という部分が最も大きな共通点だったと思います。

米国の教育システムを取り入れる

山田 内科研修一つをとってみても、米国では病棟を含めてジェネラルな内科全般をきっちりトレーニングし、それから一つの専門性へ進む。日本の場合にはスキルやテクニックの教育が優先されがちなのが現状です。

町 若い人たちはやはりテクニカルスキルを覚えたいと思うものですからね。でも最初の数年間は、内科は内科のジェネラルを、外科はジェネラルサージャリー、一般外科をしっかりやっておくと、将来的にいろいろな面で伸びるし、いろいろな問題にも対処できるようになるので、日本でもぜひそういう方法を推進したいですね。小児科、産婦人科も同様です。

日本の方が誤解しているのは、米国はスペシャリスト志向だと思われている点です。しかし実際は、例えば内科では、循環器、呼吸器、消化器などの専門へ進む医者もまず3年間は内科のジェネラル、すなわち一般内科(総合内科)を研修しなければいけない教育・研修システムになっています。一般外科なら5年間で、希望者はそれから胸部・心臓外科、小児外科へといったシステムです。日本でもぜひそれを導入したいですね。そうすればどんな地域に行っても仕事ができるし、その中で循環器に特に力を入れたいなら、数年間をその研修に費やすことで、循環器に強いジェネラリストになれます。

山田 そうですね。われわれも当初は地域に密着し

たジェネラリストの育成を主体にしたいと思っていましたが、そうは言っても基本的には病棟管理など内科医として全般的なことをきちんと学ぶべきだと考えるようになりました。優秀なジェネラリストを育てるという目的だけではなく、JADECOCOMの研修医全体、将来スペシャリストになる人たちも、スーパースペシャリストになる人たちも、臨床医としてすそ野の広い基礎力がつけられるような研修を充実させたいと思っています。ぜひ先生方の力をお借りして、米国型のジェネラルな研修を取り入れたいですね。

町 JADECOCOMの研修で育った医師たちが地域に出て診療し、またそこに来た若い人たちを育てる。そういうふうには日本の地域医療全体をボトムアップするような形になると嬉しいですね。

われわれ野口・NKPのもう一つの目標は、日本においてグローバル化についていける医者を育てることです。今シンガポールでは米国のACGMEという卒後臨床研修評価認定組織と組んで、研修プログラムの改革そして認定を行っていこうという動きがあります。今後、中近東や東南アジア各国、南米でもACGMEインターナショナルの展開が始まっています。ところが日本にはそういう要望がありません。日本でもこれからは世界標準でものを語っていかないとよいものは導入できないし、世界を相手に

語れない.かといって,外へばかり出ていくのではなくて,標準医療,あるいは教育を日本の中に根付かせる.そういう橋渡しの役割ができればと考えています.

山田 今回,東京ベイ・浦安市川医療センターで,先生方がグローバルに通用する医師研修システムのモデルケースを構築されようとしているのはとてもよいことだと思います.私自身はさらに先生方に,JADECOCの初期臨床研修にいろいろなアドバイスをいただいて,JADECOCの研修全体の質を上げるのに力を貸していただきたいと思っています.

町 もちろん,ぜひとも協力していきたいと思っています.



聞き手:地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長 山田隆司

地域医療の課題と一緒に取り組む

山田 現在JADECOCは,今回の震災で被災した女川町立病院を総力を挙げて支援しています.先生はじめ野口アラムナイの先生たちにも女川の支援に協力していただいています.それと同じようにわれわれがカバーしているへき地・離島へも先生方に行ってもらって,そういった地域ではどういう臨床能力が必要とされているのか,またどういうストレスがあるのか,実際に見ていただきたいですね.あるいは,臨床医としてだけでなく教育者としてのマインドを持った人たちがへき地,離島の診療所にもいるので,そういうリソースをどうやって活用したらよいか,一緒に考えていただけるとありがたいです.日本の地域の開業医師の多くは診療所で一人で医療を担っており,学生教育や研修にかかわる機会が少ないのが実情です.また地域病院の勤務医でも研修にかかわる機会は少なく,米国のように,屋根瓦方式で教えることと仕事をするのが表裏一体のようになっているシステムとは全く違うのですね.

町 診療イコール教育という意識と姿勢,そして屋根瓦方式教育をつくっていくと,みんなが次の世代にステップアップしていくので,伸びるのです.ですから医者は常に教育者・指導医であってほしいと私は思っています.

山田 管理型の研修病院だけでなく,地域の中小病院,へき地診療所,そこに行っているドクター,スタッフなど,JADECOC全体が教育・研修に対して興味や関心を持つような環境づくりのためにも,先生方による刺激をもらいたいですね.

町 そうですね.大事なことだと思います.ある意味で意識改革なのです.みんな能力はあると思うので,その意識を変えるだけでかなり違うはずです.それをお手伝いできればと思います.

このインタビューを通じて,JADECOCの会員の方にぜひ知っていただきたいのは,米国の教育の方法・システムは取り入れていきたいと思っていますが,特別な異色な診療をするわけではありません.実際にはJADECOCの地域の診療,それをサポートするスタッフ育成のため

の教育を目的としているということです。

山田 そうですね。地域医療の質を上げるためのツールやノウハウ、あるいはいろいろなリソースと一緒に充実させていくことができればいいのではないかと思います。先述したこの度の被災地支援についても、私にとって地域自体が壊滅してしまったところで復興にそった形で医療再生をお手伝いするのは初めての経験です。そこに先日野口アラムナイの佐藤隆美先生が支援に来てくれて、「一緒にこの問題を考えよう。野口の研修医にとっても支援に力を貸すことは学びになる」と言ってくださいました。そういう意味で私は先生方に地域医療という難題と一緒に解き明かしていく心強い味方として、力を貸してほしいなと思っています。困っている人たちを助ける医師を育てるのだということが、本来は医師教育の中でのマジョリティにならないといけないと思っています。

町 そうですね。今は医療も教育も都会志向で、何でもモノがあるところに合わせてレベルをアップしていく傾向が強くて、ますます地域格差ができてしまっています。CTがなくても教育はできます、そしてCTなしでも教育ができる能力の

ある医師を育成したいです。地域医療の現場、特に今回の被災地医療などは、医療のサイエンス面だけでなく、アート面に触れ、それを学ぶ機会を与えてくれます。最終的には、日本全体の医療の質を上げないといけない。日本の地域医療は崩壊していると言われている中、それを支えているJADECOMを教育研修面を通してなんとかお手伝いしていきたいですね。

私たちは研修、研修と言っていますが、研修が最終的な目的ではありません。研修は手段なのです。最終的には、あくまでも研修という手段でよりよい医療を提供すること。特に今困っている地域に医療を提供するというのが、一番の目的だと思っています。その土台となる、基本的なところをしっかりと作っていきたくと思っています。

現在はへき地や離島といった地域でも、遠隔教育、テレカンファレンスなど、さまざまなことができます。そういったツールをうまく利用して、どこの地域にいても同じようにレベルアップできるようにしたいですね。

山田 ありがとうございます。

常に前進する

山田 最後に、現在へき地で頑張っている若い医師に対してメッセージをお願いします。

町 実は、私は最近名言と迷言に凝ってしまっていて(笑)。今回の震災でいろいろな名言を思い出したのですが、“Learn from yesterday, Live for today, Hope for future, The most important thing is to keep moving forward.”という言葉があるんですね。「過去から学びなさい。現在を頑張って生きなさい。将来に希望を。大事なことは立ち止まらないで、常に前進していくことだ」と。被災された方は今本当に大変だと思います。

今はなかなか希望は持てないかもしれないけど、日本人は我慢強いし努力家ですから、必ず復興できると思います。医療の面でも同じです。若い人たちに多くの夢を持って常に前進してもらいたいですね。

若い人に特に言いたいのは、一つは目標を高く掲げること。ミケランジェロが言った言葉に「目標を低くして達成してしまうことが一番悪い。達成できなくてもいいから目標を高く持ちなさい」と。それからもう一つはキューリー夫人が言った「自分が成し得たことにはもう興味はな

い、自分が何かしなければいけないことを常に見つめている」という言葉があります。キュリー夫人はノーベル賞を2つ取ったのですね。普通ならノーベル賞を1つ取ったら、もうそこに安住してしまってもう新たな研究などしようと思わないのではないかと思うのに、彼女は物理学賞を取ったあとに、ノーベル賞を取ったことなどどうでもいいのだとまたさらに新研究を続

けて、ちょうど100年前のことですが、今度は化学賞を取ったのです。目標を高く掲げる、夢を持つ。それに対して前進する。医療の面でも、教育の面でも、若い人たちにそういう気持ちを持ってほしいですね。

山田 先生がまさにされてきたことですね。

町先生、今日はお忙しい中、本当にありがとうございました。

